

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究費

2011年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	文学部・教授	澤田 直 印
研究課題	フランス現代文学・思想に見る「危機の草稿」---戦争・政治・革命	
研究期間	2011年度	
研究経費	500,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、20世紀フランスを代表する作家・思想家ジャン＝ポール・サルトルの残した膨大な草稿資料を取り上げ、これらの草稿の中で展開される政治的危機状況をめぐる考察を分析することにより、これまであまり注目されることのなかった草稿研究における「政治性」に光を当て、文学研究および草稿研究に新たな視座を導入するものである。その意味で、フランス文学、哲学、政治思想の分野にまたがった横断的な研究といえる。第二次世界大戦後のサルトルは、それまでのノンポリ傾向から一転して、政治性を強めることになるが、その変化の過程は、戦中日記や書簡のうちにつぶさに見て取れる。それらを丹念に調査し、思想形成を歴史的文脈で跡づけるものである。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ジャン＝ポール・サルトル] [草稿研究] [政治]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の射程はきわめて広範におよぶものであり、今年度はいわば準備期間として、サルトルの草稿の現状についての包括的なサーベイを行い、今後の研究の基盤を作ることにあてた。より具体的にはフランス国立図書館をはじめ、各地に散在する草稿の状態を概観できるような資料目録の作成が不可欠である。同様の資料目録は、研究代表者も参加しているフランスの近代草稿研究所 (ITEM) のサルトル班が共同作業で行い、2008 年冬から暫定的なカタログを ITEM のホームページ上に掲示しているが、まだまだ不整備であるので、その欠落を埋めるべく、まずは個人的なデータベースの構築を開始した。

個別的な成果としては、前期サルトルから一貫して見られる同性愛者をはじめとするマイノリティに対する視線という、これまでほとんど研究が行われてこなかった分野を新たに開拓したことである。セクシュアリティ及び同性愛の問題は、これまで『聖ジュネ』との関係で言及されることはあったものの、たいていの場合、ジュネおよび同性愛に関するサルトルの理解の浅薄さを指摘するレベルに留まっていた。しかし、今回の研究で、サルトルの小説や演劇のいたるところに同性愛者が登場し、重要な役割を演じる意味、また後期の『家の馬鹿息子』にいたるまで受動性ということがアンガージュマンと密接に関わっていることなど、サルトルのコーパス全体を俯瞰した。その上で、特に長編小説『自由への道』を中心に同性愛というテーマが浮き彫りにする問題構成を検討することができた。

同性愛というモチーフが開くのは、通常私たちがサルトル思想に対して懐いている二元論、あるいは二項対立をすり抜ける中性的な思考であるということができるだろう。それゆえ、同性愛の問題をより十全な仕方では、おそらくより広く「人間」という概念と関係づけて考察されるべきであろう。フランス語の *homme* が「人間」と同時に「男」を意味することは英語の *man* と同様であるが、この曖昧さがじつはサルトルの考える *humanisme* の根幹とも関わるからである。一例をあげれば、サルトルがしばしば同性愛者に付与する弱さ、卑怯者 *lâche* は、負の男性的原理である *salaud* 下司野郎と、そして正の男性原理である *héros* と対立するのだが、じつはまさに同性愛者の存在こそが、英雄にも卑怯者にも下司野郎にもなりうる人間の条件を露わにする。サルトルの同性愛理解に様々な短所があるとしても、それにもかかわらず、このトポスは無自覚的に男性原理を前提としている古典的なヒューマニズムを越えた、よりフェミニンな新たなヒューマニズムへの道の可能性を示唆している。

以上の点に関しては、「サルトルにおける同性愛の表象と役割」(日本サルトル学会、第 27 回研究例会、2011 年 12 月 3 日、於立教大学) と題する口頭発表において一部が発表され、5 月に『別冊 水声通信「セクシュアリティ特集」』に論文が掲載される予定である。

また、もう一方でサルトルにおける歴史意識の問題についても全般的な考察を行うことができた。これは特に、1938 年刊行の『嘔吐』、1945 年から刊行の『自由への道』という長編小説をとりあげ、それらの草稿や戦中日記や書簡といった資料を照合することで、サルトルの歴史意識の発展を社会・政治・歴史的な文脈のうちで検討する作業である。フランス語の *Histoire* には歴史と物語の二つの意味があるが、『嘔吐』においてはこの言葉は主に「物語」の意味で用いられてきた。ところが、主人公のアントワーヌ・ロカンタンは「歴史」の論文を準備するという設定になっている。ここに *Histoire* の二重性がすでに見られるが、第二次世界大戦前夜から、「奇妙な戦争」を経て、パリ陥落にいたる激動の時代を描く『自由への道』においては、今度は大文字の歴史が前景に出てくる。

研究成果の概要 (つづき)

第一巻「分別ざかり」で描かれたのは、ある種の階級に属する人びとにとってはまだ個人の歴史＝物語 {イストワール} が大文字の歴史＝物語とは独立して存在すると思いきむことができた悠長な時代である。ところが戦争という極限状況の接近によって、人びとはそのような個人の歴史＝物語など幻影にすぎないことを実感せざるをえなくなる。この大いなる幻滅、幻影からすこしずつ目覚めていく過程が第二巻「猶予」のテーマとなっていると見ることができよう。このような変化は、『戦中日記』におけるサルトルの戦争やそれにともなう社会状況の変化に関する記述にきわめて明確に読み取ることができる。

戦前と戦中の意識の急激な変化は、『自由への道』という長編小説に大きな変化をもたらさざるをえなかった。このことから自ずと第一巻と第二巻の違いが出てくる。第一巻「分別ざかり」の登場人物たちが中流階級に属すパリ人たちであり、小説の舞台もほとんどパリ市内に限定されていたのに対して、第二巻「猶予」ではフランス全域、ドイツ、チェコ、スペイン、モロッコへと空間的に拡大するだけでなく、登場人物も、労働者や農民から上流階級や政治家まで一挙に広まる。出自も傾向も階級も異なる人びとが戦争によって否応なく同時代を生きることになり、これまでのような階級、世代、性差などの対立構造がそれ自体としては意味を持たなくなるのだ。その意味で、「猶予」の主題は個々の人物というよりは、状況のうちで生きる人びとのあり方、サルトル哲学の言葉で言えば、「歴史性」ということになろう。かくして、哲学書『存在と無』ではいまだ観念的であった「歴史性」という言葉がきわめて具体的な内実をともなって、その後のテクストに現れることになる。

以上の点に関しては、「Jean-Paul Sartre, un aventurier en quête d'histoire」と題して、国際シンポジウム *Comment la fiction fait histoire, Emprunts, échanges, croisements* (2011年11月20日、関西日仏学館)においてフランス語で発表された。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④「ジャン＝ポール・サルトルのアメリカ」 (立教大学、第15回人文研究会、2011年10月19日立教大学)

④« L'intellectuel en question au Japon » (『現代フランス知識人事情、アジアでの対話：知識人を問う』報告、2011年11月10日、於日仏会館)

④« Jean-Paul Sartre, un aventurier en quête d'histoire » (国際シンポジウム Comment la fiction fait histoire, Emprunts, échanges, croisements, 2011年11月20日、関西日仏学館)

④「サルトルにおける同性愛の表象と役割」 (日本サルトル学会、第27回研究例会、2011年12月3日、於立教大学)